

# 心十界の略説

## 永生の巻

### 目次

御遺文	一
永生の光	一
付録	一
御逸事	二七
思出	三四
憶我師父	三九

## 永生の光

天地は廣大に宇宙は無邊である。然して天の有ゆる星宿も各々世界とすれば、世界は無數である。其中に活ける物も亦無量である。有ゆる世界及び一切生物を佛教では悉く總括して十法界に攝めて遺すことない。我らが此形の生存するのは無形の心を本とす。一切生物の本源たる宇宙には宇宙全一の大心靈あり。之を佛教で如來藏心と名づく。一切の世界と生物とは夫から發現せしのである。大心靈から産出されたる世界と生物とは悉く心を本とす。此心が因縁に依りて十界種々の生物と爲る之を衆生法と云ふ。斯心が大心靈の光明を得れば衆生が悟りて佛と成る之を佛法と曰ふ。此心に光なき者迷ひて六凡と爲り光を得たる物は悟りて四聖と爲る。故に六凡と四聖とは心を本とす。經に心と衆生と佛とは本來無差別と説給ふ。心から十法界の身と心と國土とを生ず。實に不可思議である故に妙法と云ふ。

## 心十界を具し又十界を造る

宇宙全一の大心靈から發生したる十法界の衆生なれば、一切の個々は悉く其子として個々の心に六凡四聖十界の性を有てをる。然して其働きの最も強き物を造り出すものとす。各自の心に十界の性を有てをる故、縁に觸れては鬼の様を恐ろしき殺氣が起る。之地獄の性、亦他の業を嫉み、慳貪を起す餓鬼の性、愚痴横暴は畜生の心、憍慢僞徳は修羅の因、人墮落の中にも良心の責を感ずるは是人の性、慈善や公德の分あるは天上の性である。又眞理を聞けば悟りたいと思ふ是聲聞の性、生死の理を明めたいと思ふは是緣覺の分である。縱令無佛論者でも絶待の場合には自から稱名の聲を發す、是佛性あればなり。愆の如く人々十界の性は具さに有てをる。然して何を造るかは、種々の因縁から其生涯の業に由て決定す。之を業十界を造ると云ふ。

## 十界の略説

地獄界 是れ三塗の中に火塗と云ふ。八大地獄乃至數多の地獄あり。罪の輕重に依りて苦を受くること同じからず、然れ共火に燒かるゝ苦同じ。故に火塗と云ふ。大焦熱無間等は最も劇苦の處、十惡五逆の業邪見の心から倒さまに落て烈火に燒る。罪業の薪ある限りは火消ることなし、之を地獄と云ふ。

餓鬼界 或は山林塚廟に祀るゝ鬼神あり、又不淨處に在りて飲食を得ずして飢餓に苦しむあり。何れも鞭撻をうけ刀劍を以て截切せらる如き苦あり。故に刀塗と云ふ。

畜生界 動無相互に否噬して、血を流して苦を受く。故に血塗と云ふ。畜生又は傍

生と云ふ。横さまの生物の義。是天理人道の正きを行はず、理に聞く横さまの行爲から受くる身である。羽毛鱗角乃至昆蟲等に至るまで三十億の種類ありと。世に形を人類に受乍ら、横暴なる虎狼に類し破廉恥なる犬の如く人を魅すこと狐に似たるあり、身は人たるも心意と行爲は畜類より劣れるあり。恚の如き因あり、何ぞ畜生の果無らん。

修羅界 斯界に身を受けば、常に闘争を事とし、勝敗定りなく唯負くことを憂ひて、恐怖の苦休むこと無しと。世に僥慢擧高の野心家、ナポレオン、カイゼルの類より下は劣等なる野心家身の分を顧みず名譽又は權威の争ひに逐鹿の闘を挑み、彼ら内に誠實なく、外賢善を装ひ自から是とす。之修羅道と成るべき性格である。

人間界 縦令形は人類たるも、人格具備せざる者は未だ眞の人ならず。人身を受けたる者自から人格備はらば、教育に修身科の必要ならん。佛教に謂ゆる五戒を保ち、儒教に云ふ五常に叶ふ人にして、人格具はりたるものとす。世の教育及び人道道徳は全き人を形成するを目的とす。

天上界 六欲天と色無色との三天あり。六道中最幸の處。欲天は高等なる快樂をうく、是れ衆と樂しみを共にする仁人君子生るゝ處。梵天は冥想觀念又は禪定を以て、思想を精練したる梵士の到る處。最も清明澄潔にして、形なき如き定力の感するは無色天とす。愆く善惡各三等に分ち、苦樂の果を受く。是らは生死の凡夫故に六凡法界とす。

聲聞界 先覺者の教を受けて道を修め悟をうる故に聲聞と云ふ。四諦の法を以て得道す。一に凡夫の受くる生死は實に苦なりと諦に認めて之を出んとす。二に生死の苦因は煩惱であると認めて之を斷せんとす。三涅槃樂を諦かに證るを滅諦と云ふ。四に涅槃を得る道品を諦かに修む。聲聞に四階あり、最後を羅漢とす。此に到れば生死を離れ真空涅槃を證し三明六通八解脱をうる。

緣覺界 十二因縁を悟りて涅槃を得る故に緣覺と云ふ。十二因縁とは無明、行、識

名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死、生死の根本は無明なり。無明滅すれば、生死を盡す故に、永生の涅槃を得神通等は聲聞と同じ。

菩薩界 上求菩提下化衆生として自ら成佛を期し、下一切衆生を導き自他共に佛道を得んと願求す。大乘佛教の成佛を期する者は、是菩薩とす。又佛子とも云ふ。是佛の子順て親と同じく成佛するの謂である。此に生身と法身とあり。觀音勢至文殊普賢等は法身の菩薩、龍樹天親聖德善導空海法然等は生身の菩薩である。已に佛心を起したる人は即ち菩薩にて、例へば如來は靈界の太陽にて凡夫の心は晦日の如し、菩薩の初發心は纖月の如く、漸々に光を増長して竟に滿月と爲れば佛陀と成りしのである。

佛陀界 智慧慈悲等の萬德圓かに備はり一切種智を得て自ら覺り他を覺らしめ、萬德圓滿して缺ぐことなきを佛陀とす。釋迦牟尼是なり、四聖の中聲聞と緣覺とは眞の成佛に非ず。唯佛陀のみ究竟して無上道を得たりとす。

### 大乘の歸趣

大乘佛教にて人生歸趣の理を明し玉ひし法華經に、佛が此世に出給ひし一大事の因縁は、衆生の佛知見を開きて佛の正道に入らしむる爲である。云換れば凡ての佛性て佛に成り得る性を開發し、靈育して成佛せんが爲であると。又譬へば此に財寶無量の長者あり、其子が會て父の許を迷ひ出で、遠く寒里に在りて甚だ零落し困苦す。父は之を憐れみ方便して子を呼びよせ、初は自から子たることを覺らぬ故に先づ不淨の掃除杯を爲せ、後に財寶を悉く其子に讓與すとの喩を以て釋尊が衆生に對する本意を説玉へり。由之見れば我らは佛の子であれば佛の如く空きに成り得らるゝものである。之を復活する光明は即ち佛法なるを信じて永生の涅槃に歸趣するを大乘佛教の目的とす。

### 自己の人格の核はいかに

果樹類が春は花咲き、秋の末に實の成熟するまで、一年の働きは生産起元の作用なる種子を造る爲である。凡の種子核には、生物の元形質の細胞が一切の枝葉根莖等が微込式に伏在して、其が縁を待て萌發して、意に大樹となる。種子核が熟せぬ實には生産作用がない。此理は人格の核を成す神識にも比例せらる。人々生涯の善惡の業はアラヤ識の核と爲て其種子に微込みて、地獄乃至六道の自體果を生すべき能力と爲る。因あれば必ず果あり。因果相關し六道に輪廻す。我らが生涯の業人格の核が十界の中何れを成熟すべき哉は各自の心意と行業に由る。畢竟自業自得の結果が我が人格の核となるものとす。佛教は衆生をして六道生死を出で、永生涅槃に歸るにあり、即ち人々本具の佛性の心地に佛種子を播し之を培養し心靈の花開き永生の實を結ばしむるにある。恁の如きは靈的人格とす。人いかにして靈格の核を爲さしむべきやは後篇に述べん。

### 如來の三身

大乘佛教を知らんと欲せば、先づ如來三身の譯を能く了解し給へ。如來は本一體なれ共、一方には一切を産出する本と爲て法身と云ひ、一面には法身から受たる衆生の心靈を攝化して、永恆の常樂に歸らしむ報身と名づけ、又人類を教ふる人佛釋迦と現れては應身とす。是を法報應の三身とす。

法身 梵に毘盧遮那、翻すれば偏一切處と云ひ、宇宙全體を身と爲るの謂である。前篇に宇宙全一心と云ひしは、宗教的に表せば法身佛とす。故に宇宙は永遠に活ける佛である。形式としては天の日月星辰の運行より乃至地上の一切生物の生成に至る迄の萬法の原則の故に法身と名づけ、内容としては此毘盧舍那の胎内に無盡の性徳を具寫し、萬物を産出す故に如來藏性と云ふ。法身の親から産出されたる衆生なれば衆生も皆小法身小造物である。夫と共に佛に成り得る性を有てを。然るに人の具せる

九

佛性は喩へば鶏の卵子の如し。之を孵化せば雛と爲るやうに衆生の佛性の卵を攝取し靈化して佛性を復活さしむるは即ち報身佛である。

報身佛 梵に盧舍那、譯すれば淨滿亦光明遍照と曰ふ。淨滿とは如來は萬徳圓滿して宇宙最上の位に在り、紫金の身に無盡の相好を具へ、衆寶莊嚴の淨土に眞善微妙の園に淨樂我常の花匂ふ處に法身諸の聖者の爲に陀受法樂を施し玉ふ。故に淨滿と名づけ、又光明遍照とは即ち如來は靈界の太陽にて例へば太陽が光熱化の能を以て生物を化育する如く如來は、智慧慈悲威神の光明を以て衆生の心靈を靈育し玉ふ。若し日光なくば地上の生物が生存できぬ如く、如來の光明を離れて衆生成佛すること能きぬ。如來の靈徳無量である。十二光を以て萬徳を總括して遺さぬ。斯光明が即ち一切衆生の心靈を復活せしむる靈力である。

應身淨界の報身から身を分けて此世に出給ふ釋迦牟尼佛を應身とす。釋尊が世に出玉ふ本懷は一切衆生を間の裡より救出し永遠の光明に入らしむるにあり。即ち報身の光明に歸命して靈を活さしむるなり。佛は八十歳にて入滅し玉へども、神は無量壽の本土に還りたまひしにぞ。

斯の三身は唯一の無量光なる無量壽佛である。

### 報身の光明

心靈界の太陽なる一切衆生の心靈を攝取し靈化し玉ふ光明實に不可思議なり。一切諸佛は斯光に依りて靈に活きて正覺を成じ玉ふ。一切萬徳を攝めたる十二の光明に就て活ける佛法をたどる時に靈に活きる道は開けん。實に釋迦一代の教は悉く十二光の中に盡きて遺すことない。

### 無量光 (如來體大、絶對の大靈態)

良に彌陀は十方一切諸佛神明の本佛にて一切萬法を統攝し、一切萬徳の歸する處、

一

正覺の光徧く十方を照して衆生を佛化し玉ふ。故に無量光と名づけ、一切を永恆の常樂に歸せしむ故に無量壽と爲す。諸佛の正覺を取たるは即ち無量光を得たること、常恒の涅槃を證すとは無量壽に入りたるの謂である。故に諸佛は此光明に依て正覺を成じ無量壽の涅槃を得給へり。

無邊 光 (大智慧の相、徧照せざる無し)

日光の世界を照す如く如來四智の光明徧わく十方の心靈界を照し衆生の知見を開き一切智を與へ給ふ。四智とは、

一、大圓鏡智 例へば日光出づれば地上の山河大地乃至一切の萬物悉く顯るゝ如く如來鏡智の光にて衆生の無明照破せられ、十方三世一切の依正色心悉く現前す。

二、平等性智 我々が吾我分別の迷を照破し各自の自性は本來清淨にして諸佛と同一平等なりと自覺せしむ。

三、妙觀察智 如來我に入り、我如來に入り、また如來の身口意の三輪は我々が三業に涉入し我々が迷の意識は轉じて佛智と相想せしめ一切種智を與へ給ふ。

四、成所作智 我々は汚れたる心から五根も汚れ依て不淨の五塵界を感ず。若斯智に同化せらるゝ時は佛眼乃至佛身と成るが故に、諸佛と同一相好及び清淨國土を實感す。

斯四智は凡夫の無明の阿賴耶識を轉じて、佛陀の四智に同化し給ふ光明である。

無礙 光 (衆生の靈格を作り給ふ徳)

斯光は衆生の弱點なる煩惱を解脱して、至高の道徳とし聖き人格即ち佛と成さしむ徳用である。如來最高なる眞善美の靈界に在まし神聖正義恩寵との三徳を以て、衆生に儼臨し給ふこと、太陽の光熱化を以て生物界を化育するが如し。

一、神聖としては如來は道徳律の日光として至善の座に在まし、道徳の原則と爲り、

又至善の標準と爲り衆生の行動を照鑑し且つ行爲の正智見を與へ給ふ。  
二、正義としての如來は我々が邪と惡とを捨て正と善とを撰みて向上せしむる勢力を與へ給ふ捨惡撰善の原である。

三、恩寵としての如來は衆生の慈母とし、一切を愛し佛性明を化し、我々佛子を靈育し長養し給ふ。

斯三徳は如來が衆生の父母として聖き人格即ち佛と成すの靈用である。

無對 光 (衆生に正覺と涅槃を證せしむ)

斯光は如來が一切を攝取し給ふ終局は衆生をして諸佛と同一正覺を成じ、大涅槃に入らしむるにあり。如來と衆生とは本來親子たるに拘はらず現在には正反對に立てざる如來は絶対無限眞善美等にして、衆生は有限生死罪惡闇黒等にあり。若し斯光に攝化せられたる終局は無明を變じて正覺の光とし、生死を轉じて涅槃の常樂と爲す。涅槃とは即ち極樂の淨土淨樂我常の輝く處、常寂光土、又蓮花藏世界、無量光明土等の異名あり。一切諸佛は常に此涅槃界に在て、一方には常恒に生死界に來りて衆生を度し、一切衆生が靈に活き、究竟成佛の曉は、諸佛即ち彌陀一佛彌陀即ち一切諸佛の義を證らん。

炎 王 光 (衆生の煩惱を脱却する力)

一切衆生に齊しく脱却せねばならぬ弱點を有てをる。之を煩惱と云ふ。見思と塵沙と無明とである。衆生は此煩惱の爲に靈に活きることできぬ。是動物欲及び意識的の惡にて煩惱から業を造り業から苦報をうく。衆生念佛して斯光に觸る時即ち煩惱脱却す、大火炎に汚物を焼くが如し。喩を以て光明とす。

光明に靈化する衆生の心相

一切衆生に齊しく脱却せねばならぬ弱點を有てをる。之を煩惱と云ふ。見思と塵沙と無明とである。衆生は此煩惱の爲に靈に活きることできぬ。是動物欲及び意識的の惡にて煩惱から業を造り業から苦報をうく。衆生念佛して斯光に觸る時即ち煩惱脱却す、大火炎に汚物を焼くが如し。喩を以て光明とす。

經に若し衆生ありて、斯光に遇ふ者は三垢消滅し、身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ずと。又如來の光明は遍く十方世界を照せども、念佛の衆生のみを攝取して捨てずと衆生佛性の卵は如來の慈光に孵化せられ、闇黒の我が死して光明の我と生れ、生死の凡夫は轉じて永生の佛子と爲る。我ら汚と惱と闇と罪とに亡びゆくを復活し清き喜と悟と善とに靈化せらるゝ、光明淨化の真相を略解せば、

清淨光 (人の感覺を淨化する)

此光は人の汚を滌ぎて清く美しくする作用である。凡夫は眼に視耳に聴き鼻に嗅ぎ舌に味はひ身に觸れ、美色美味杯の爲には、衛生及び道德をも顧みずが奴隸と爲り、又は墮落の淵に沈むあり。此五欲人の心を染汚す。故に五塵と云ふ。又人の徳義心を賊ふ故に五賊とも云ふ。若斯光に淨化する時は自己の靈性八面玲瓏として身心皎潔なるを感じ、又美化したる感覺は天地新らしく靈日麗はしきを覺え、恰も赫々たる日光が寶石に映する如く、亦心靈の花開き、馥郁として靈感極りなく、天樂和雅の音を揚げて心耳の快感を覺へ、八功甘露の水は津々として舌を潤はす、淨化したる感覺より見れば處として淨土ならざるはなし。

歡喜光 (苦を抜き樂を與へ給ふ)

我ら凡夫の感情には、煩悶懊惱極りなく、恐怖憂愁絶ゆることなし、即ち煩惱である。若し如來の斯光に融合し心神美化する時は、内心常に平和に、心廣く體肝かにして、法悦の樂に三味の妙味を覺え、常磐の春麗らかに心靈の花苞ひ、香氣芬々として靈感極まりなし、即ち身は娑婆に在り乍ら、神は常樂の園に遊び、形は憂世に置なれど、靈は彌陀と共に在り。斯光諸佛は受けて、自受法樂と爲し、菩薩は享て陀受法樂を感ず。若し國土に現はるれば、聖樂と幸福と共に輝ける極樂國土と爲る。吾が友よ眞の靈福を得んと欲せば須らく斯光に來たれ。

智慧光 (迷を轉じて悟を開かしむ)

元來我ら凡夫は、生死問題及び靈界の消息に就ては實は無智である。三世因果を照す知見なく、佛身及び佛土を見るの明なし。然るに世には自己靈性の盲目たるを識らず、還て無佛無靈を主張する族あり。若し自己の無知を自覺し、一心に念佛し三昧成就し、如來智慧光の太陽が顯はれ來る時、正知見開けて佛身及び佛土を知見し、又佛智佛徳をも悟入することを得。例へば日光出づれば萬物明かなる如く斯光に依て一切の佛法現前す。一切諸佛の智慧とは斯光を得たるに外ならぬ。

不斷光 (惡を廢め善に進ましむ)

我らの意志は卑劣な我慾から動いてをる。即ち煩惱の奴隸である。人が善惡の二つに分るゝ所以は意志方向のいかゞに依る。人々前に述べた十界の中、何れかに向つて行爲してをる。人の意志は不斷に持續し我志望む方に向つて働く。夫れが繼續すれば習慣と爲り、竟には性格と爲り、然して地獄とも又佛心とも決定することになる。若し斯光に靈化する時は、罪惡我は轉じて靈我と成り、闇黒の生活より光明の光活と變ず釋尊生涯の行爲宗祖の活動は我らに好模範を示しなされし。我らは佛の子である親の如く全からんことを願望とす。如來の聖意を我意とし、不斷に向上し自ら進むと共にすべてを誘ひ自己と同じく成佛せんことを願望とす。佛子が靈的活動を爲す原動力は即ち如來の不斷光である。

信仰過程の三階位

如來の光明に復活されし心相は已に明しぬ。此よりは初發心より靈の生活に入り及び向上する道程を明すに三階位とす。

難思光 (信心喚起の位)

經に若し衆生ありて其光明の威神功徳を開いて、日夜に稱説して至心不斷なれば、意の所願に隨つて其國に生ずることを得て乃至佛道を得ると云々。

一切衆生に悉く佛性を有す。何人も佛に成り得る、心田を有てをる。煩惱の雜草繁けれど、業障懺悔に心田を懇やし、如來光明の眞理を聞いて信仰の聖種と爲り師及知識の保護をうけ、殊に自ら至心不斷に念佛を執持して止ざる時は信心の萌發と爲る信心の喚起に自修と相續とあり。自修とは自ら一心念佛して信心の確固と爲る。相續とは師友の心力感傳にて信心喚起せらる。甲の燈燭より乙に傳はる如し。何れにしても人生の大事なること熱誠を要す。釋尊は一向に専ら彌陀を念せよと示し給ひ、聖善導は一心に専ら彌陀の名號を稱へ、念々に捨ざれと教へ、聖法然は誰一向に念佛すべしと勧めなされた。彼聖者の教を信じて至心不斷ならば必ず信心の曙光と爲るならん朝夕の拜禮讚稱等は皆心靈を養ふ糧である。内に自ら信念増進し如來の恩寵に育まれ靈の種は萌發し信心喚起の満位とはなる。

### 無稱光 (信心開發の位)

已に信心喚起して佛種が萌發す、是よりは恩寵を被りて信心の花開かんとす。微かに光明を得て從來の我を顧みれば自己の罪惡また無慚の甚だしき今は慚愧に耐へず業障深重なる我は如來の光明に依て生れ更らざれば、浮ぶ瀬なしと思へば、彌慈悲の御親が頼母敷感じらる。如來と離れぬ身とならざれば安心できぬ。我本如來の子なれ共、煩惱の魔に隔てられて親子の共暮しができぬ。彌業障深重が苦悶を感じ、刻々苦奮勵は鐵垢を去りて純金を練り出す如く、また例へば寶石琢磨し日光反映する如く佛我に入り、我佛に入り神祕の靈感激喜極なきを覺えて信心の華開く。こゝに於て闇黒の我は光明の人と生れ更る之を開發の位とす。如來に靈感の妙味は言語に稱べるこ

### 超日月光 (衆生體現の位)

信心已に開發し、心靈更生したる後は即ち之れ佛子である。此よりは光明中の人として智慧と慈悲との恩寵を被り、聖意を承たる意志として靈的活動を爲すべきである。肉體が太陽の能力に依て活ける如く、心靈は如來の光明に由て活く。教祖が生涯に洩りて身の行爲口の言語意の思想を以て完全なる道徳の鑑を爲せし如く、我ら之に倣はざるべからず。如來の聖意を我心として之を實行に顯はす。之れ靈的の光明の生活である。我らが靈を活動させる如來の靈徳を超日月光と名づく之を體現の位とす。

### 南無の三心

如來は心靈界の太陽として、光明徧ねく照して遺すことなし。然るに衆生何なる心意を安てか如來の聖意に相應うべき。若し衆生の安心が如來の聖寵と合せざれば、救済に預かることできぬ。こゝに於て安心の要ある。經に十方の衆生よ、至心に信樂して我國に生せんと欲して我を念せよ。必ず我許に生れん。若し生ぜずば我も正覺を取らず。

是れ如來より衆生に對する聖意である。至心とは至誠心。人の心に如來から受たる佛心と人の子たる煩惱(私欲と兩面あり。私欲は虚偽にて佛心は至誠である。佛性の至誠を以て、我を信じ我を愛し我國を欲望めよとの心に在ます。故に衆生の汚れたる罪の我が清き我即ち佛子と生れ更らんと欲せば、如來を信じ如來を愛し靈國に生れんと意を以て如來を念すべきである。之を三心と云ふ。略して解せば、

### 至心に深く信す

信とは如來との關係を認めて疑はぬこと。信に二種あり、一に現在の我は汚と惱と闇と罪とにて自己の力にては解脱できぬものと。二に如來の心光は此の我を攝受して佛化し給ふものと。衆生信水澄む時は佛日の影映る。我らが信心澄ぬれば佛我に入り給ふ。信心の水は一心に念佛する處に湧き出す。念佛とは我心即ち佛に入り佛心

我に來り給ふ。恰も池を穿ちて水を出す如く、念佛すれば如來の心水即ち湧き出づ。念々に佛を念じて無限の泉源より我に湧き出だす信水常に満ちぬれば、佛日我に在して、永しへに照映す。信に三位あり。一に仰信、知解に互らす唯一に師友の教を信じ一向に如來の心光を仰ぎ不思議に感應して救済の實をう。二に解信、宗教上の真理即ち如來と我との關係を能く理解して信すること。三に證信、實修の功果として佛身又光明等を實驗して信すること。三位の中何にても不動の信を得ればよろしいとす。

### 至心に如來を愛念す

如來を愛念するは感情の信仰である。宗教の中心眞髓は感情にあり。如來を全く我有として親密なる關係と爲り、熱誠が血に湧き歡喜涙に溢れ靈の戀念忘るゝ能はざる等は感情の信仰である。如來に對する愛念に三位あり。一に小兒が母を慕ふ如くに愛す。小兒は世に母程頼母敷きものはない。我らも如來の外に永遠の頼みとするもの無き故に凡てに超て如來を愛念す。二に異性に對する様に如來を愛念す。法華に一心に佛を見まく欲しさに戀慕して止まざれば佛は現はれ出で、爲に説法し給ふとの愛念。三入我々入の愛念、如來は我が大我にして我と如來と冥合して不可離的に如來を愛するは眞の我を愛するに外ならぬ。中心眞髓の愛より出づる念佛は全生命に合一することになる。

### 至心欲生の念

欲生は生きんと欲する念、即ち意志の信仰である。一切生物は悉く肉に活きんが爲に全力を用いてをる。今の欲生心は即ち無限の光を得て永遠の生命に活きんとの望である。最高等なる理想即ち彌陀の中に生れ、最高等なる人格即ち佛に成らんとする念である。聖靈曰く彼の極樂の受樂無間なるを聞て樂を貪る爲に生を求むるは不可である。願くは自ら佛に成らんが爲、自ら佛に成ることは一切衆生を度はんが爲一切と

共に永遠の安寧を得んが爲に如來の國に生を求るのであると。憐の如きの望は如來を離れては不可能である。故に念々に佛を念じ如來の聖意を我意とし佛子の目的を到達すべきが欲生の念である。

結勸。上來説來る結歸、南無阿彌陀佛なり。

十二光は如來が我らに對する恩寵、即ち子等を靈育する靈能にて南無の三心は我等が如來の心光を受くべき信仰である。能く此眞理を會得した上は唯一向に念佛し如來と常恒に離れず、然る時は是れ光明中の人である。現在を通じて永遠にまで如來と共に在るなり。然れども此肉の有る限りは自然の約束は免れぬ。否實は此身は光明中の人と爲りて聖意を現はすべき器械である。彌つとめあげたる後は極樂涅槃界に還りて、如來と共に永遠無窮に一切を攝化せん。願くは世の同胞よ、同じく如來の子たる實を現はさんことにつとめなむ。

### 辨榮上人御逸事 (其六)

五香 善光寺 辨誠 輯録

善光寺本堂未だ成らず、僅かに残されたる一茅屋(當所もと東京田中氏製茶場のあとを貰ひ受けたるものなり)に居住し玉へる頃、或年の初秋拂曉風荒れて動搖甚だしく、まさに倒壊せんことを幾度なるに、恰も共に宿りける某氏先づ起ち、速かに屋外に避難し給はんことをすゝむる急なりければ、上人亦ハア、とばかり從容、その後へに従はせて出でさせ、程近き他の軒下に風雨を避けさせ給ふに、前方なる竹藪の竹影のきびしく吹きつけられつゝある様を見させ、某氏にの給ふやう「ナント竹の動くさまは奇麗ですね」と。

上人曰、此土の花鳥風月も粗ではあるが極樂の一分現である。

尋ね参らす「阿彌陀經の説相莊嚴は、此土のソレを理想化したに過ぎませんか」。

上人巍然として威儀を示させたまひ。

「否ナ、深き三昧に入れば白き華が降る」。

上人曰、信仰の上にも貞操と云ふことは大切なことである。

曾て自分の知人、某氏の家庭は世々念佛を宗とし當主の長女某嬢亦久しくこれに歸依して實行の信者なりしが、世は月にむらくもの喩へにもれず、十八九歳の頃、フト病魔の襲ふところとなり、永らく病床に仰吟して癒へず、家人ひたすら其全快の早からんとのみ千々に心を碎かれたけれど甲斐もなく、病勢益々亢進して今は芳春の生命も風前に揺らく燈明の如く明滅せり。

恰も、兼ねて父君園菘の友達として口頃其家に入出入する日蓮宗某寺住職某氏あり。常に此の様を見て憐愍の情に堪へず、頻りに題目の効顯、日蓮宗の獨勝を強説し、父君を介して一日早く令嬢の信仰轉換を勸むること度重なりければ、父君は今は無下にも之を斷はり兼ねつ、——「デハそれほどまでに御心切におす、め下さるなら、こう致しませう、實は、アレは御存じの通り大變な念佛信者ですから、私から勸めてもとても六ヶ敷いことかと思ふので、何ナラ、貴師から左様直接おす、め下さい。そしてアレさへ承知すればいかにも仰せ通り一家を擧げても左様しませう、と約されけるにぞ、某師よろこび勇みて、隔てたる奥の一室に厚く敷き重ねたる床に病みと疲れに寢れてし令嬢の枕邊ちかく言葉して——「お嬢さん——御病氣は如何ですか、私もとうから一度御見舞いたしたいと心に掛けて居ましたが——、實は私は御存じの通り日蓮宗の僧侶で、と云つて殊更らに我が田へ水を引くと云ふ譯ではありません。が、實際釋尊一代經中に於て効顯獨り勝れて高き我宗に入り一心題目して變はらざれば、必ら

ずやその功德により如何なる難病災禍と雖も轉せざるなき我妙法に、一日も早く歸依信賴せられて精進し下さい。私も亦及ばずながら共に御祈り申し上げますから——。實は私からコンナ事を申上げては些とナンであるかは知れませぬが、實は自分も四五百の檀家を有つて居りますので日に一ツや二ツの葬ひはあり、其他にもいろ／＼と忙はしいのですが、此の御家のアトを繼がせられねばならぬ大切な貴嬢の御身を思ふまごゝろから態々來ておす、めするのですから、どうか今日からでも是非とも左様下さるやう………に、と。諄々勸められけるに。

靜かにそれを聞きてける令嬢の、話終れる時、重き頭を擧げて尋ねけるやう

「まことにかゝるそゝつかな者の上にも左程にまで御親切をかけさせられ真にありがたく御禮申上げます。付きましては今から直ぐにも御言葉にしたがひまして左様いたしたいのでありますが、少々ばかりお尋ねいたしたいことがありますノデ……」。

師「何なりとも御たづね下さい」

嬢「つきまして、只今の御話によりませば貴師は毎日お葬いのある中を態々御出下さいました様に承はりました。が、……」

師「はい」

嬢「一體、貴師の檀家の方でも死亡なりますか？」

師「そりや死亡なります、此の世のことは兎角、生者必滅會者定離と云つて、どうもそればかりは致し方がありません。特に自坊は四五百もの檀徒を有つて居りますので、日に一ツや二ツは止むをえませぬ」

嬢「デハ、貴師がたの様な御僧侶の方は死亡なりませんか？」

師「イヤ、百福莊嚴の佛世尊と雖も御齡ひ八十歳にして屍陀林一片の煙りと失せ玉ふたのではありませんか、世縁盡くれば如何することも出来ませぬ。何人もこれに逆ふことは出来ませぬ」

嬢「それで私も安心いたしました」



師「デハ、左様願へますか？」

徒「否ナ、さやうに御忙がしい中を 態々御出下さつた御親切の程は幾重にも深く御禮申上げます。が、これで私は以前にも増して念佛して行きます」

師「その理由は？」

徒「別に他意あるのではありませぬ、貴説の通り初めから日蓮宗の家庭に生れ、しかも日々さる尊き妙法に奉仕信順せられつる御僧侶方の上にも、悲しき世のさだめは遠慮なく吹き付けるとのことではありませんか。まして御らんの通り命、旦夕に迫まる廢殘の私が久しからざる餘命を以て轉宗題目しましたとて、とても此の重病が回復するまでの御利益が頂けることゝは思はれませぬ。出來ぬことを願ふのは罪惡であります。念佛は日頃より信行して來た私の生命であります。どうで助からぬ生命なら、念佛と共に死んで行きたうございます。死んで行きます。今は世に望みなき吾が身にはセメテモこれが何よりの念願であります……」

と、やつれつるそのいたゞしき中にも横顔に見る眉宇一抹の決意の影やどれるにぞ、某帥また言葉なく徒らに手を拱いて辭去せりき。

此事ありてのち、その不壞の信によるか、果た、世縁の未だ盡きざりてか、さしにも重き業病も、日、一日と薄らぎゆきて、遂には舊にも増してひとしほと健康體の人となられけるとなん。

上人曰、これ、大ミオヤに對する、吾人の貞操である」と、の給ひき。

## 思ひ出

法阿

鳥取京都横濱當麻上諏訪の御化導を終へ給ひし恩師辨榮聖人は、越後の新發田大善寺の授戒會に御轉錫遊ばす可く、信州上諏訪驛を夕景四時前長野行ききの列車にて御出發になりました。時は大正九年十月廿五日で其の頃の隨行は大阪の〇さんと私の二人でした。汽車中上諏訪で頂戴した握飯の辨當をいたゞき、昏暮の禮拜を了へ、聖き御國三身等の讚歌を歌ひ、其の間には尊き御法話をも拜聴しつゝ、長野驛に着きしは夜の十時頃でありました。然るに旅行案内にある新潟行ききの不定期汽車は折り悪しく發車しないので夜中の二時過ぎ迄待たなければ汽車がないのであります。身を刺すやうな冷い風は斷へ間なく吹き、夜が更けるに従ひ寒さがだん／＼加はりますから、之れではとてもたまらない増して、御老體の御聖人様は以前より少々御健康を害しておられる御模樣であつたから、萬一御障りがあつてはと思ひ、旅館に御休みになることを御勧め申し上げたけれども聖人様は、それには及ばないことゝ待つとの御言葉故、此の上無理に御勧め申し兼ね躊躇して居る内に聖人様は待合室の板の腰掛の上に文庫を枕に御横におなり遊ばしました。吹く風益強く寒さは愈加る、然るに聖人様は何等不満なる御氣色もなくいと平和なる御顔に慈眼を閉ぢさせらる。其の尊顔を拜しては餘りの尊さ勿體なさにも人目も憚らず感泣せざるを得なかつたのであります。

それより新發田、中條村上新潟長岡の教化がすんで、柏崎極樂寺の別時にならせられ早々左の御法話がありました。

『別時とは他のことをやめて、専ら御念佛するを云ひ道場の莊嚴も平生とは異り時日を入れて一生懸命に御念佛するのである。最も肝心なことは心である即ち娑婆の心を極樂の心にかへていたゞくのであります。別時念佛し心がだん／＼それに熟してくればどこに何を居てもいつも其の心持に住することができます。念佛するときは專

ら如來の御慈悲の中に入る思ひをなし、是非共進みたいと思ひ又必ず進まして下さること、所期と云ふて豫期心が最も肝要である。別時の宗とする處體とする處皆彌陀にあつて一心一向に心を如來にとめてゆく即ち如來を一心に念ふてゆくのである。口に念佛を稱へば心も如來に向はなければならぬ。

如來の御慈悲は宇宙に周遍して居るも吾人の心がそれに向はなければ光を受けることはできぬ。如來は見へなくとも自分の眞向ひにましますと思ひて念佛するのである名は體を召すと云ふて、天と云へば天が思へる、月と云へば月が思へる如く、南無阿彌陀佛と稱へば如來が念へる。唯一の如來が眞正面にましますと念へば、眞にましますのである。されど吾等の心は散亂し易きが故にいつも他にうつる、其の度び毎に心を移して念佛するのである。未だ信仰心が生きてこないから如來がわからんのである然し光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨で、既に如來の光の中に攝められてゐる。卵が親鳥の羽根の中にあるが如く、吾等も如來の慈悲の中にあるも卵の如く、それに氣がつかないのである、されど攝められて居ると自然に信仰心が生きてくる。

何事も一心で真心あればできない事はない。人間は早か遅か必ず死なねばならぬ。卵の如く中味ができて死ねばよいけれども、できないうちに死ぬると三惡道に墮る。今頃は改造と云ふ言葉がはやるが先第一に我が心を改造せねばならん、心を改造する爲めに別時念佛を修するのである、云云(フートの中より)

以上はほんの概要であります。然し之れは聖人様最後の御説法で、然も御發熱中病苦をおしてゝあつた。今より考へれば實に勿體ないことでありました、説法がすんでから他の依頼により御墓の文字を御書きになり、引き續き佛畫三味の御様子であります。けれども御見受すると餘りに御容體が悪いので御願ひして御床に就て頂きました。爾來病勢はつるばかりで一同懸命の御看病も効を奏せず、化縁の盡き給ひしは如何ともできず、十二月四日の朝最後御訓戒を御名残りに、稱名裡中安に御遷化遊ばしました。南無阿彌陀佛……唯涙……唯南無阿彌陀佛……唯涙……合掌

## 噫 我が師父上人

田 中 鏡 禪

落葉散り敷く初冬の朝  
薄靄未だ四隣をこめ……

靜かに追悼歌を口誦むと、おのづと目蓋が熱くなる。木枯吹き荒む師走の初め師父上人は衆生濟度の最後の杖を越後の國に曳き給ふて、遂に其の地で遷化遊ばされた。思へばそれは七歳の昔である。師父上人は實に釋尊の應現であつた。私は勅修御傳のはじめに記者が讚する如く、ふかく平等一子の悲願を、おこしますによりて忽に無勝壯嚴の化をかくしてかたじけなく娑婆濁惡の國に入給ひし釋尊で在したと信じてやまない。二祖が宗祖を讚して、我が大師釋尊はたゞ法然上人なりと言はれたが如く此の實感こそは理屈を抜きにした信受歸依の心情である。私は宿縁拙くして六ヶ月ちがひで其の慈容に接する事が出来なかつた。それは私にとつて一生の憾である。面謁した人々がその仰せられた御言葉などを語り合ふのを聴く時、どんなに私の胸は懐しさに躍つたであらう。その時ほど悲喜交々の感にやるせなく覺える時はない。上人在世ば……私は幾度か其の言葉を繰返して歎いた。されど上人は決して遠くへ去り給ふたのではない、現に念佛する者の前に慈眼をもつてみそなはし給ふのである。かく信する事によつてやゝもすれば放逸に走らうとする心に鞭をうたせて、白道を歩んで來た。私は淨土教學を専攻して居るが、上人の指南なくば私は遂に宗祖の皮髓にふれず悶々の人世を送らねばならなかつたであらう。されど私は救はれた。上人の御教を受けて經典を繙く時、經文の一字一句が生ける實相の活現であり無漏慧の對象である宗祖が聲を囁らして叫ばれた往生の意義が、ほんとうにはつきりする。勿體なくて有難くて合掌悲咽せず居られない。私は再び言ふ。辨榮上人世に出でまさずば淨土教の研究ほど至當な無味なものなからう。更に言ふ、上人世に出でまさずば我等は如

何にして眞實生に目覺める事ができたであらう。今や經典史研究の見地から大乘教典は所謂佛説ではなく後世の佛教徒によつて構成されたものである事が、一般の學徒によつて承認せられるやうになつた。されば上人の指南を仰がなかつたならば、三部經は一つの小説としての價値しか認められなかつたであらう。そして法藏比丘はそのドラマの主人公としての地位より與へられなかつたであらう。殊に阿彌陀佛は釋尊入滅を悲歎追慕するの餘り佛弟子達によつてその心中に畫き出された佛陀、即ち釋尊の復活としての意義より見出されなかつたであらう。されど三部經は小説でない釋尊の徳相の象徴化が彌陀佛ではない。三部經所説そのまゝ實相のあらはれであり阿彌陀佛は實に現在説法の大ミオヤである。かゝる深義を上人の御化導によつて如實に信する事の出來た我等は如何に恵れたものであらう。此の喜びを思ふ時どうして精進せずに居られやう。我等は勇猛勵精して無邊の大慈恩に報ひ奉らねばならぬ。

大正十五年十二月廿五日印刷  
同 廿八日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)  
年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成  
發行人

東京市小石川區茗荷谷町九八  
印刷人 小林 七太郎

發行所 東京市小石川區水道端二ノ四四  
ミオヤのひかり社

總發東京六八五一番